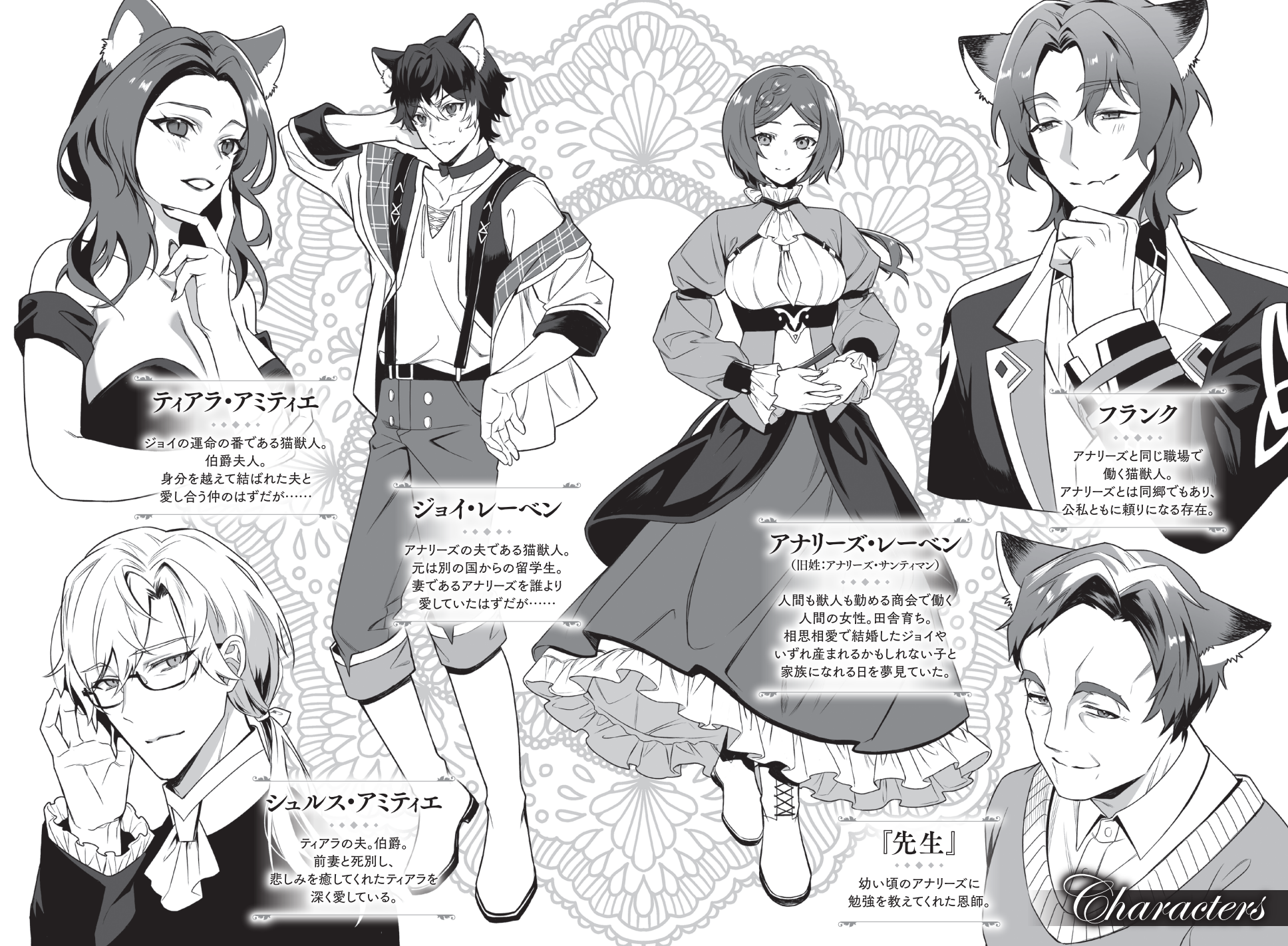


もうやめましょう。

あなたが愛しているのはその人です



ティアラ・アミティエ

ジョイの運命の番である猫獣人。
伯爵夫人。
身分を越えて結ばれた夫と
愛し合う仲のはずだが……

ジョイ・レーベン

アナリーズの夫である猫獣人。
元は別の国からの留学生。
妻であるアナリーズを誰より
愛していたはずだが……

フランク

アナリーズと同じ職場で
働く猫獣人。
アナリーズとは同郷でもあり、
公私ともに頼りになる存在。

アナリーズ・レーベン

(旧姓:アナリーズ・サンティマン)

人間も獣人も勤める商会で働く
人間の女性。田舎育ち。
相思相愛で結婚したジョイや
いずれ産まれるかもしれない子と
家族になれる日を夢見ていた。

シュルス・アミティエ

ティアラの夫。伯爵。
前妻と死別し、
悲しみを癒してくれたティアラを
深く愛している。

『先生』

幼い頃のアナリーズに
勉強を教えてくれた恩師。

Characters

「それじゃあ、ちょっと番に会いに行ってくるから。ええと帰りは……七日後、かな……」

申し訳なさそうに眉尻を下げながら、しかし、どこかいそいそと浮足立った様子でそう言うてる夫に対し、アナリーズはなんてことないような顔をして元気に送り出した。

「行つてらっしゃい、気を付けて。番さんよろしくね！」

獣人であるアナリーズの夫、ジョイは、魂の伴侶とも言える番に出会ってしまった。彼がこの先もアナリーズと夫婦関係を続けるためには、ある程度の時間を番の女性と共に過ごす必要があるのだ。

『別に性的な接触は必要ないし、獣人としての本能を抑えるために、番と二人で一定時間楽しく過ごすだけ』

『だから浮気とは違ふし、この先も夫婦としてやっていくためにはどうしても必要なこと』

そんな説明を受けてからというもの、ジョイは一ヶ月に一度、仕事のついでに番の女性に会いに出掛ける。……妻であるアナリーズをこの家に残して。

アナリーズはそれを受け入れた。

夫であるジョイを愛しているから。

必ず自分のもとへと帰ってきてほしいから。

今日もとびきりの笑顔を貼り付けて、番のもとへと向かう夫を送り出す。
自分の内側がズタズタに引き裂かれていくような胸の痛みには気付かぬふりをして――

アナリーズが夫と出会ったのは、もう随分と前――二十二歳の頃だった。
当時、既に働いていたアナリーズは王都でも中堅の商会で経理の仕事に就いていた。締め日が近くなると、経理の仕事はどうしても残業になりがちだ。

仕方がない。取引先への支払いが遅れば商会の信用にも関わるし、給与計算が間に合わなければ困るのは同僚の商会員たちだ。よって、それらの期日が迫れば残業をしても終わらせるしかない。

その日、アナリーズが商會員の給料の支払い手続きを終えて勤務先の商会を出るときには、既に日付が変わっていた。

時間に追われて昼食を摂_とっている時間も無かった。そのせいでかなりの空腹だったが、これ以上遅くなるのは御免だと、アナリーズは行きつけの朝までやっている食堂へは寄らずに、まっすぐ街はずれの家に帰ることにした。

しかし、少しでも早く帰ろうと、公園を横切ったのがまずかった。運の悪いことにそこでたむろしていたガラの悪い酔っぱらいに絡まれてしまったのだ。

「なんだあゝ姉ちゃん、こんな時間に一人で危ねーな。へへ……そうだ、良かったら俺らが家まで送ってやんよ」

「……おっと、逃げんなよ。ほおら、遠慮せずにこつち来いってえ」

「へええ……オネーサンよく見たら結構いいカラダしてるじゃーん。もしかして着やせするタイプ？ 確かめてやるからちよつと見せてよ」

「や……やめてください！ 誰か助け……うぐつ……」

アナリーズは走って逃げようとしたが、相手はガタイのいい男。しかも三人。

あつという間に捕まえられて、大きな手で口を塞がれる。叫び声さえ上げられずに、無理やり暗がりに連れ込まれそうになってしまった。

もうダメだ。アナリーズが諦めかけた、そのときだ。

「あゝあ、人がせっかく夜のお散歩を楽しんでたのに騒がしいなあ。お前らそんなでかい図体_{ずたい}して、人間つてのは群れないと女も口説_{くど}けないのか？ しかも、同意も得ずに無理やり交尾しようとか最低だろ。オスとして恥_はずかしいのかよ？」

「ああつ!? なんだ、テメーは……ひっ」

口をガッチリと掴まれていて顔を動かせないが、どうにか声のする方向へ視線だけでも向けると、暗闇にキラリと光る二つの目が見えた。軽快な語り口とは裏腹に、漂う空気は殺気にも近い。

「やべ……獣人だ。お、おい、お前ら行こうぜ」

「お……おう……つ」

「ち……っ」

威勢の良さはどこへやら。酔っ払い三人組は、アナリーズを放り出して慌ただしく逃げていく。酒臭い男たちから乱暴に背中を押される形で解放されたアナリーズは、突き飛ばされた勢いのまま数歩進んだ。そのままその場に力なくへろへろと崩れ落ちる前に、素早く走り寄った男性によって両手で軽々と抱き上げられる。

いわゆる、お姫様抱っこだ。

「……おotto。危ない、危ない。こんなトコ座ったらキレイな服が汚れちゃうよ。お姉さん大丈夫？ ケガはない？」

「は……はい。大丈夫……です」

心配そうに顔を覗き込んでくる男性の目は、先ほどと同様にキラキラと輝いている。そして、その頭には特徴的な猫の耳。

（獣人……）

月明かりに照らされてぼんやりと浮かび上がる、自分とはまるで違うシルエットに、アナリーズは目を見開いた。

獣人は王都において、かなり複雑な立ち位置だからだ。

この国には現在、四種類の種族が暮らしていると言われている。

『王族』、『貴族』、『人間』、そして『獣人』。

『王族』と『貴族』については国の支配層に対するただのやつかみ交じりの皮肉だが、『獣人』だ

けは本当に種族が違う。

彼らは近年、獣人国——文字通り獣人だけが住む国——からの移民が増えたことで見かけるようになった者たちだ。その名の通り様々な動物を祖としており、それぞれ元となった動物の性質を色濃く引き継いでいる。

多くの獣人が人間よりも遥かに力が強いこと、また、数十年前までろくに交流がなかったこともあり、人間からは怖れられる存在となっている。

鋭い牙で食い殺されるとか。

強い力で身体を引きちぎられるとか。

死肉を食らうとか。

王都でも獣人を見かけることが増えてはきたが、人間に比べればまだまだ数が少ないせいで、噂ばかりが広まっているのが現状だ。

先ほどの酔っぱらいたちが一目散に逃げていったのも、そんな無責任な噂を聞いていたからだろう。

（——そんなことはないのに）

実際のところ、獣人はとても温厚で仲間思いの義理堅い種族なのだ。

アナリーズの商会は獣人国とも取引があるため、多くの獣人たちが働いている。おかげでアナリーズは彼らの真実の姿を知っているし、王都に蔓延^{はびこ}る無責任な噂に振り回されることもない。

もちろん、種族によっては気難しい者たちもいるにはいるが、性格の良し悪しは人それぞれ。そ

のあたりの事情は獣人も人間とさほど変わらない。

閑話休題。

助けてくれた男性の、暗闇に光る神秘的な瞳に魅入られて、アナリーズがついついその輝きを凝視していると、居心地が悪そうについて……つと、その目を逸らされた。

「あー……ごめん。もしかして、獣人だからかえって君を怖がらせちゃったかな？ 身体も震えてるし」

そこで気付く。傍から見れば今の状況は、抱き上げられて固まった、ともとれるだろう。

「あ……ち、違うの。ジロジロ見たりしてごめんなさい。貴方の目がキラキラしててすごくキレイだったものだから、つい見惚れてしまつて……。でも、獣人の方ってそういうの苦手なのよね？ その、知り合いに獣人の方もいるけれど、今まで夜に会ったことはなかったの。だから、ビククリして……あの、助かったわ。どうもありがと……あ……っ」

うまくまとまらないまま喋っていると、むしろ気を遣われてその場に降ろされる。しかし、アナリーズの足の震えは治まらず、獣人の彼にしがみついてしまった。

「ご……ごめんなさい!! これは貴方が怖いとかじゃなくて……、その……」

「あー……、うん。君が躊躇なく俺にしがみついてきたから流石にそれは分かった。……まあ、あんな目に遭つたら、すぐに切り替えるなんて無理だよな。よし、ちようどいいや。少し腹減つてきたから、食事に付き合つてよ」

そう言つて彼は再びアナリーズを抱き上げた。

「あ、ちよつと待つて。私、自分で歩け……そうも、ないわね……ごめんなさい」

慌てて声を張り上げるものの、震えを自覚しているため、段々と尻すばみになってしまった。

「ははは！ お姉さん素直でいいね」

獣人の男性は楽しげに笑うと、飲食店が立ち並ぶ賑やかなエリアへと歩き出した。

人のいない公園内はともかく、明るい場所に来ると行きかう人々の視線が二人に突き刺さる。仕方がない。ただでさえ街中でのお姫様抱っこは目立つし、男性の身長が高いこともあつてどうしても人々の目を引いてしまうのだ。

今の状況でそれを気にしてもどうしようもないのは分かっているが、気になるものは気になる。

時間帯が時間帯だけに酒が入っている者が多く、冷やかし交じりの声まで聞こえてくる始末。それを堂々と受け流す彼は大物なのか、人間の国に暮らす獣人として日頃から視線を浴びることに慣れているのか……

興味津々の眼差しから逃れるように視線を逸らすと、視界の隅にゆったりと揺れるしつぽが見えた。もちろん、アナリーズを軽々と抱き上げている獣人男性のものだ。可愛らしいそれをなんとなく眺めているうちに、不思議と周囲の視線は気にならなくなっていった。

そうして連れていかれたのは、偶然にもアナリーズの行きつけの食堂だった。一応酒も置いているが、深夜勤務の労働者向けの食堂なので、酒の種類は少ない。そのせいかこの時間にやっている飲食店としては酔っぱらいの姿が見られず、活気はあるものの治安はいい。いわゆる『飲み屋』とは住み分けができていた。

危険な目に遭った衝撃は強かったものの、通い慣れた店へと来た安心感から、アナリーズは心の平穏を取り戻した。獣人はテリトリーを気にすると聞いたことがあるけれど、人間にもそれはあるのかもしれない。薄暗い公園よりも、この少々うるさい空間の方がアナリーズには合っている。

お通しを食べ終え、メインディッシュが来る頃には声が弾むようになっていた。彼も店を気に入ってくれたようだ。

「美味しい!! 適当に入ったけど、美味いな、この店!」

「でしょ!? この煮込み料理は絶品なのよ。もっと食べて、食べて!」

すっかり元通りになったことを自覚し、そもそも空腹を感じていたのだから最初からこちらへ向かえばよかったとアナリーズは反省した。しかしここで落ち込んではまた気を遣わせてしまうだろうと明るく振る舞う。

「……あー……でも、本当にいいのか? 誘っというてなんだけど、実は俺あんまり手持ちが……」

一方で、あんなに頼りがいのあった獣人男性の方は店に入ってから少々大人しくなっている。アナリーズに勧められるままに料理に手を伸ばすが、気後れしているようだ。

どうやら、シヨックを受けているアナリーズを安心させるために、とりあえず人が多い店へと入ったようだ。アナリーズは彼のその心遣いをありがたく思った。

それだけに、どことなく落ち着かない様子の彼を見て、申し訳なさを感じてしまう。

そこで笑いながら提案した。

「ふふ……危ないところを助けてもらったから、これはそのお礼よ。ご馳走するから、好きなもの

を注文してちょうだい。実は、お昼ご飯を食べ損ねて、私もお腹が減っていたの」

「……えーと……じゃあ、遠慮なく!」

彼はアナリーズの言葉に、ホッとした様子だ。

そして宣言通りに遠慮することなく料理を注文して、パクパクと豪快に食べ進めていく。その食べっぷりが見ていて気持ちがいい。

男性の見事な食べっぷりに食欲が刺激され、先ほど怖い目に遭ったばかりのアナリーズも、しっかりと昼食兼夕食兼夜食を摂ることができた。

そして、美味しい食事を食べてリラックスすれば、自然と会話も盛り上がる。

獣人の男性はアナリーズよりも二つ年下で、まだ学生。聞いたところによると、留学のためにこの国に来たばかりらしい。あちこちに獣人の気配を感じるものの、あの公園だけは誰のテリトリーでもないからと、夜の散歩を楽しんでいたらしい。

獣人としては、やはりその辺が気になってしまうのだそうだ。

「……まー、本能とはいえ、都会で暮らすやつらは段々その辺の折り合いがついてくるらしいけど、俺は獣人国でも田舎の方の出身だったからさ。やっぱ、慣れるまでは少しキツイ」

「ふふ……なんか意外だわ。猫さん、あんなに力持ちで強いのにね」

「『ジョイ』」

「え?」

「ジョイ・レーベン。それが俺の名前。ちゃんと名前前で呼んでよ。お姉さん、この国に来て初めて

できた人間の友達だからさ。ああ、さん付けもやめてくれよな。柄じゃないし」

そう言って、やや不満そうにアナリーズを睨みつけてくる彼を可愛らしいと思ってしまった。先ほど、酔っぱらいたちを殺気だけで蹴散らした野性味あふれる姿とはまるで別人……というか、別猫だ。

「分かったわ、ジョイ。私はアナリーズよ。アナリーズ・サンティマン。アナリーズでいいわ」
「そっか。へへ……よろしくな、アナリーズ！」

時間帯が遅かったこともありその日は早々に解散したが、それからアナリーズとジョイは急激に親しくなった。ジョイが留学してきたばかりとあって、まだこちらに知り合いが少なかったのもあるのだろう。

ジョイから落とし物をしたと相談されれば一緒に探して問い合わせ先を教えたり、学生にとって必要不可欠な図書館の利用方法もアナリーズが教えた。

一方で、女性には相談しづらいこともあるだろうと思い、アナリーズが何かとお世話になっている面倒見のいい同僚の猫獣人の男性を紹介したが、ジョイは何故か不機嫌になるばかりでアナリーズにしか頼ろうとしなかった。

性別に加え同種族にしか分からないこともあるのではないかと……と氣を利かせたのだが、獣人の場合は違うのだろうか？ 紹介した猫獣人の同僚に聞いてみたけれど、困った顔をされるだけだった。

ジョイはアナリーズの職場近くの飲み屋でバイトを始め、アナリーズが仕事で遅くなるときには必ず家まで送ってくれた。

酔っぱらいから絡まれた後、あの暗い公園を通ることは流石にやめたが、かといって毎月の残業がなくなるわけではない。結局は同じような時間帯に帰っていることをジョイに知られて、アナリーズはひどく怒られた。彼が職場近くの飲み屋で働きだしたのはそれからすぐのことだった。

どうやら、ジョイはアナリーズの繁忙期に合わせてバイトのシフトを入れているらしい。流石に、ここまでされたら恋愛とは無縁だったアナリーズもジョイからの好意に気付く。

だが、そこからすんなりと交際に至ったわけではない。

何故なら、ジョイが非常にモテたからだ。

この頃に一度、彼が働く飲み屋に行ってみたが、長身で顔の整ったジョイは、敬遠されがちな獣人にもかかわらず、バイト仲間からも客の女性たちからも大人気だった。それを見て、アナリーズは自分では彼に釣り合わないと思込みをしてしまった。

今になって思えば、そこで萎縮して何もなかったのが悪かったのだろう。

ひょんなことから、ジョイが好意を寄せているのがアナリーズであると、彼と同じ大学の女子たち、それとかなり派手で苛烈な性格の集団に知られてしまったのだ。

『年上のおばさんのくせに』

『地味女がどういうつもり？ いい加減ジョイに付き纏うのはやめて』

仕事のアナリーズを呼び出し、文句を言うだけ言って帰っていく嫌がらせが始まった。それも

一人や二人ではない。

若く、可愛らしい女の子たちからとはいえ、敵意に満ちた視線は怖い。こうも呼び出されては商会の業務に支障が出るのではと、アナリーズの心はどんどん萎縮していった。

幸運だったのは、彼女たちの呼び出しが礼を欠くものだったこともあり、職場の面々が皆アナリーズに同情的だったことだ。

「すいませーん、アナリーズって女を呼んでもらえます？」

きゃぴきゃぴとした若い女の子たちの声が商會内に響く。またかと立ち上がったアナリーズを制したのは、同僚のフランクだ。以前ジョイに紹介した、面倒見のいい猫獣人である。彼は営業部でアナリーズは経理部なのだが、営業部から経理部に来ると商會の受付が視界に入るので、彼女たちの言動を見るに見かねたのだろう。

「アナリーズはここにいて」と小声で告げた彼は、そのまま彼女たちに近づく。

「お待ちせいたしました。面會をご希望ですか？　ですが、名前だけでは……その者の所属する部署か、せめてフルネームを頂戴できませんでしょうか」

「えっ!?　ね、ねえどうする？　そんなの知らないわよ」

「適当に言えればいいわよ。それより、この人もなかなかカッコいいじゃない。なんか、優しそうだし。ついでに名前とか聞いちゃう？」

「やだもー、今日の目的は違うでしょ。あのう、部署とかよく分からないんですけど。年上のおばさんのくせに私たちのジョイにしつこく付き纏^{まと}っている女がいて困ってます」

「アポイントメントは取っていらっしゃいますか？」

「え!?　い、いえ。ただ、ちょっと話したいだけで、何もそんな……」

「そうですか。業務時間中ですので、ご要望には応じかねます」

きつぱりと告げたフランクは、表情だけは笑顔のままで続ける。

「それから、所属商會員保護の観点から身元不明者との面會は許可できませんので、念のために皆様のお名前と連絡先を伺ってもよろしいでしょうか。商會員への付き纏^{まと}い及び当商會への営業妨害と判断した場合には騎士団へ通報の上、保護者及び学校等へ連絡をさせていただくこととなりますが……」

「ひ……っ!?」

「な、何よっ！　いいわよ、みんなもう行きましょ!!」

フランクの毅然とした対応に怖気づいたらしく、女の子たちは慌ただしく帰っていった。小さく悲鳴が上がったのは、学校に連絡が行くことを恐れたのだろう。

確かに、彼女たちから見れば、アナリーズはおばさんに違いはない。ジョイに付き纏^{まと}っているつもりはないのだが。

「ふう……もう帰ったから大丈夫だよ。しっかりと脅しておいたから二度と来ないんじゃないかな。今日の子たちは、だけどね」

「ごめんなさい、フランク。貴方にばかり迷惑をかけてしまって」

「いいよ。別に君が悪いわけじゃないんだから気にしないで。ただ、あの子たちが言っていたジョ

イって、前に君から紹介された獣人国からの留学生だろ？ 僕がいるときはこうして代わりに対応できるからいいけど、運悪く君しか手が空いてない、なんてことがあったら心配だよ。あの手の女の子たちってしつこいしさ。何かあつてからでは遅いし、あんまり続くようならしつかりと彼に伝えた方がいいんじゃないか？」

「……そうよね。少し対応を考えてみるわ」

答えて、アナリーズはそつと息を吐く。

最近ではこうして、同僚たちがジョイ狙いの女の子たちを追いつめてくれるようになったが、これ以上迷惑はかけられない。アナリーズもいい加減覚悟を決めるべきだろう。

留学したての頃ならともかく、男女問わず知り合いもたくさんできて、ジョイもこの国に随分馴染んだようだ。危ないところを助けてもらったことからなし崩しに一緒に過ごしてきたが、これ以上は彼のためにもよくない。

自分が彼のためにできるのはここまでだろうと、アナリーズはジョイと少しずつ距離をとり始めた。

しかし。

「……あのさ、何で急に会えなくなったの？ わざわざ仕事場までの出勤ルートまで変えちゃつてさ。もしかして、アナリーズは俺のこと避けてる？」

しばらくして、いつもの残業帰りにジョイに待ち伏せをされたのだ。

助けられたあの日と同じように、暗闇の中で彼の目が煌めいている。少しだけ違うのは……あの

日、酔っぱらいに向けられていた殺気がアナリーズ自身に向けられていることだ。

「その……今日はたまたま……」

「嘘だね。俺も最初はそう思ったけど、こここのところ毎道を変えてるでしょ。普段通らないような道まで通つてさ。ああ、でもアナリーズがやっているソレ全部無駄だから。俺、すぐく鼻がいいから、調べようと思えばアナリーズが今どこにいるか、どの道を通ったかもすぐに分かるし」

アナリーズのすぐ傍まで来てスンつと大袈裟に鼻を鳴らすジョイ。

その距離感のまま猫獣人特有の鋭い眼光を向けられて、あの日とは逆に居心地の悪さゆえにアナリーズの方から視線を逸らそうとしたが、両手で頬をがっちり押さえられて阻止されてしまった。

そして――

「あの……ジョイ？ ……何を……んう……」

彼の端正な顔が近づいてきたと思ったら、そのまま唇を奪われた。ジョイのザラリとした温かい舌がアナリーズの唇をこじ開けて入り込み、未知の刺激が好き勝手に口内を蹂躪する。

「あ……ジョ……やめ……」

「嫌だ。アナリーズ……お願いだから」

――俺を、避けないで。

夜の闇に食うような水音とジョイの懇願するような囁きが途切れ途切れに響く。

アナリーズは、まるで自分が内側から食われていくように感じてクラクラと眩暈がした。

その初めての感触に軽くパニックを起こし、いったい何が起きているのか分からぬままにはく

はくと空気を求めて、与えられる刺激に必死で抗^{あひ}つてしていると、ようやくジョイの唇が離れた。

「……つは、はあ……ふう……はあ……」

すっかり力の抜けた下半身を支えるためにジョイにしがみついたまま、一生懸命に呼吸を整えるアナリーズ。

それを見て、ジョイは機嫌よくゴロゴロと喉を鳴らす。

「へえ……？　なんだ、恋人でもできたかと思っただけ。……もしかしてキスも初めてなんだ？」

先ほどのまでの殺気はどこへやら、ジョイはアナリーズの唾液で光る自分の唇を色気たっぷりにぺろりと舐めて、楽しそうにゆったりとしつぱを揺らした。

「ど……うして、こんな」

「どうして？　アナリーズが俺から逃げるからでしょ。人がせっかく本能を抑えて我慢しているのに、俺のこと避けて全力で逃げるとか……そんなの追うに決まってるじゃん。俺、これでも結構分かりやすく好意を伝えていたつもりなんだけどな……もしかして、アナリーズに俺の気持ち全然伝わっていなかった？」

「……だって、私年上だし」

「関係ないよね？」

「私よりもお似合いの子が」

「ソレは俺の意志と関係なくうるさいメスどもが勝手に言っているだけでしょ。……ああ、安心して。ソイツらもう排除したから」

瞬時に殺気が戻り、ジョイの目がギラリと怪しく光る。

「あ、あの……排除って……？」

「ああ、誤解しないで。乱暴なこととはしてないよ。興味ないって分からせるために、言葉で説得しただけ。そしたら泣き出して二度と俺に近づいてこなくなったよ。だって、俺にはアナリーズだけいればそれでいいからね？」

ジョイの獲物を狙う目がアナリーズに向けられる。

暗闇に光るキレイな目。

アナリーズを傷つける者を徹底的に排除して、怪しく誘う目。

……アナリーズを惹きつけてやまない目。

ジョイに助けられたあの日、彼の瞳に魅せられたアナリーズの心はとくに彼に捕らわれていたのだと、ようやく悟った。

そこからジョイの行動は素早かった。

アナリーズのアパートにジョイが泊まるが増え、少しずつ部屋にはジョイの荷物が増えていった。いつの間にか彼のアパートは解約されていて、気付いた時にはジョイはアナリーズのアパートに居座っていた。

完全に同棲状態だ。

それでも結婚するまではそういう行為はしたくない、というアナリーズの願いをジョイは聞き届

けてくれた。

夜の公園で酔っぱらいに襲われかけて怖い思いをしたアナリーズ。

あの日助けてくれた彼は、すっかりとアナリーズの意思を尊重してくれて、無理やりにそういった行為に及ぶことは決してなかった。獣人としての本能なのか春先などにつらそうにしているときはあったが、それでも必死に耐えてくれた。

……まあ、その分、季節に関係なく唇だけは散々に求められたし、結婚後にはそれはもうすごいことになってしまふのだが。

アナリーズとジョイが正式に結婚したのは、学生だったジョイが卒業し、就職してから半年ほどが経った時のこと。

彼はアナリーズが働く商会とは別の、王都でも指折りの大商会へと就職した。

貴族が経営している大手商会ながらもまだ獣人雇用の実績がなく、ジョイが獣人としては初めての雇用になる。

獣人への理解が乏しい老舗しにせ商会だけに、ジョイの実力がどれほど評価されているのかがよく分かる。ジョイからアナリーズもウチに来ないかと誘われたが、そこまでの大手商会となるとアナリーズには流石に少し荷が重い。

幸い、商会同士で得意としている分野が違うため、アナリーズとジョイが別の商会で働いていても特に問題はない。アナリーズも長く勤めた商会に愛着があったため、お互いにそれぞれ別の商会で、このまましばらくは共働きを続けることにした。

仕事終わりに待ち合わせをして。食事をしたり、買い物をしたりして、同じ家に帰る。

仕事は忙しかったが、それだけのことがとても幸せに感じられた。

結婚してもジョイの嗅覚が鋭いのは相変わらずだった。仕事上のやり取りで職場の獣人と話したときなどには、ヤキモチを焼かれてしまう。

「またアイツの匂いがする……」

「アイツ？」

「ほら、前にアナリーズから紹介された猫獣人」

「ああ、フランクのこと？ そりゃあ彼はうちの商会で断トツの成績を誇る営業のエースだもの。經理の私とは仕事上で接する機会も多いわ。それに、彼には商会に入った頃から獣人との接し方なんかについて相談に乗ってもらっているの。そのおかげで他の獣人商会員たちとの仕事もやりやすくなって、上司からも評価されるように……って、ジョイ!？」

そこでジョイにソファアへと押し倒されてしまった。なるほど、不快そうな顔をしていたのはそれが原因だったのかとアナリーズは納得する。ジョイはしきりにアナリーズの肩口を気にしているようだ。スンスンと鼻を鳴らしてしつこく匂いを嗅いでいる。

「だからって、こんなに匂いが移るか？」

「仕事に集中しすぎて声をかけられても気付かなかったのよ。それで軽く肩を叩かれて。用事が済んだらすぐに離れたし、別に変な関係ではないわ。そんなことで疑ったりしたら流石に失礼よ」

「それでもアナリーズがアイツの匂いを付けているのは嫌だ。脱いで」

「……もう」

ここからなし崩しにそういうことになるのがいつものパターンとなっている。ヤキモチを焼いている間は何を言っても聞いてくれないので、こうなったらジョイの気が済むまで付き合うしかない。何度も彼とはただの同僚だと説明しているのだが、ジョイとのゴタゴタがあった頃に顔を合わせたせいで敏感になっているのだろうか。他の獣人商会員に対するものと比べても明らかに反応が過剰なので、もしかしたら相手が同種族というのも関係があるのかもしれない。

けれど、それを言うならヤキモチを焼きたいのはアナリーズの方だ。ジョイはまったく気付いていないようだが、話を聞いているとジョイの同僚女性たちから彼への好意がすごい。怖さばかりが強調されて何かと噂されがちな獣人だが、こと女性から男性への恋愛感情に関しては種族の違いで何の障害にもならないらしい。

とにかく、長身で顔の整ったジョイはモテてモテてモテまくるのだ。

アナリーズが大切にされているのは分かるし、彼が裏切ったりしないのも理解してはいるが、こういうのは理屈ではないのだから、ジョイの方もそうなのかもしれない。

そういった些細な問題はあったが、仕事以外のほとんどの時間を一緒に過ごし、何か気になることがあればその都度話し合っていたおかげで、アナリーズとジョイはとても幸せな毎日を過ごしていたと思う。

この先もずっと、この人とこんな風に過ごしていくのだろうと——過ごしていきたいと、アナリーズは心の底から願っていた。

けれど、長年、経理畑で同じ仕事をしているアナリーズとは違って、ジョイの出世は早かった。結婚してから一年も経つとどんどん重要な仕事を任されるようになり、帰宅が遅くなることも増えた。

それでもジョイは時間の許す限り送り迎えを続けてくれたし、それが無理なときでも自分が安心できるようにとアナリーズに防犯用の高価な魔道具を持たせてくれた。

魔法や魔術、魔道具といったものは、国によって認識が異なる。この国では、そういうものもある、というだけで、実用化どころか扱える者すらほとんどいない。アナリーズが渡されたのは、ジョイが自分の勤め先である大手商会の伝手^{てづて}を頼って国外から入手した、希少な魔道具だ。

流石にこれは無駄遣いではなかったが、ジョイと出会った経緯を考えると、一概にそうとも言えないのが痛いところだ。

結局はそれでジョイが安心できるのなら、ということであナリーズも受け入れた。

アナリーズの方も仕事が忙しくなってきた家でご飯を摂れないジョイのために、弁当を作ることにした。

ジョイは少し子供っぽいところがあって、外食が続くと自分の好物だけしか食べようとしないのだ。それでは栄養面が心配だし、ジョイもアナリーズが用意したものなら喜んで食べてくれる。

そして、この弁当作りは節約のためでもあった。

大手商会で働くジョイの給料は既にアナリーズのそれを大きく超えている。彼には留学のために

借りた奨学金の返済があるが、それでもアナリーズが働かなくてもなんとかやっていけるくらいには貰っている。

ジョイはアナリーズが主婦業に専念することを望んでいるし、忙しい彼を支えるためにはその方がいいのも分かっているが、将来を考えると、アナリーズは今のうちに少しでも二人の貯蓄を増やしておきたかった。

この感覚の違いは、二人の種族が違う、ということも原因だった。

異なる種族の間では、どうしても子供がでづらい。

猫獣人なら猫獣人同士、犬獣人なら犬獣人同士、というように、獣人は同種の方が圧倒的に子供に恵まれやすい。種族を超えても獣人同士ならばそこまでもないらしいが、獣人と人間との間では桁違いに子供に恵まれる確率が下がる。

もちろん、個人差はある。同じ商会の仲間にはアナリーズたちのような獣人と人間の夫婦も多にいるが、子沢山の夫婦がまったくいないわけではない。

なかでも『番』の場合はすぐに子ができると言われている。

(番……か)

アナリーズにはそれがどういうものなのか、番同士だとしたら何が変わるのか、まったく分からない。

聞いたところによると、それは生まれつき決まっている、獣人にとつての運命の相手なのだそうです。だから、獣人が番に出会えば一目で分かるし、番同士が結ばれば、ただでさえ高い獣人の能

力が底上げされる。

いわばこの世界の主神である女神様からの祝福のようなものらしい。

そして、番の種族は子供の授かりやすさと同様に同種族同士が一番多く、次に種族を超えた獣人同士、極々まれに獣人と人間が番同士、という場合もあるのだそうだ。

しかし、残念ながらアナリーズとジョイは番ではない。

ジョイがどこか呑気なのは、子供がでづらい組み合わせであることを承知で結婚した、というものもあるのだろう。しばらくは二人の時間を楽しみたいから、と彼に言われて避妊しているが、そもそも子供に恵まれるとしても随分先の話だろう、と。

それでもアナリーズは愛するジョイとの子供を望んでいるし、愛する子供には最高の環境を与えてあげたい、と思っている。将来的に授かるかどうかは未知数ではあるが、できれば経済的な面で子供に不安な思いをさせたくないのだ。

楽観的なジョイは、その時までで自分が稼ぐから大丈夫だと言うけれど、彼の母国である獣人国は遠いし、何かあって二人で里帰りするとなればそれだけで今ある貯金は空になる。

いつ何があるか分からないからこそ、アナリーズとしては備えだけは万全にしておきたかった。

——せめて、二人が番であつたなら。

そう思うことはあるが、アナリーズは不思議なくらいジョイの番について考えることはなかった。それは、『番』という存在の神秘と共に、その希少性についても知っているからだ。

この国にいる獣人の数はまだまだ少ない。

獣人ばかりが住まう獣人国内ならいざしらず、人間ばかりのこの国でそこまで番との出会いを心配することはない、と頭のどこかで思っていた。

同僚の獣人たちの間ですら、『妻の妹のボーイフレンドが、知り合いに番同士のカップルがいると言っていた』とか、『死んだ爺ちゃんが若い頃に番の夫婦に会ったことがあるらしい』とか、要するに当事者ではなく噂話で聞く程度の遭遇率なのだ。

だから、羨ましいと思いきすれ、夫の番についてはそんなに心配することはないと思っていた。少なくとも、この時まで。

始まりは些細な変化だった。

ある日、ジョイが真つ青な顔をして家に帰ってきた。

基本的に獣人は体が丈夫で、病気をしたり体調を崩したりということは、人間と比べて圧倒的に少ない。出会ってから今まででこんなことは初めてだった。

心配になったアナリーズは獣人の商会員が仕事中の事故でお世話になったことのある、獣人の診察ができる病院に行こうと言ったのだが、ジョイは寝ていれば治るからと言って頑として頷いてはくれなかった。

普段であれば、『大袈裟だなあ』などと言いながらも心配されたことを喜んで、それでアナリーズの気持ちが落ち着くならと、しぶしぶでも行ってくれるのに。

翌日になってジョイの顔色は多少戻ったものの、それを境にボーっとしたりため息をついたり、

どこか上の空になってしまった。

あれほど毎晩のようにアナリーズを求めていたのに、そんな元気もないようだ。少しいい雰囲気になっても途中でやめてしまう。

一ヶ月ほどそんな状態が続いた時だ。

「ちよつと、獣人国に行つてこようと思うんだ」

突然ジョイが言い出した。

急なことで驚いたが、考えてみたら二人の結婚式の時すらジョイの家族は出席していない。彼の両親への結婚の挨拶は書面で交わしただけだった。

単に獣人国が遠すぎて移動が困難というものもあるのだが、元々ジョイたちのような生粋の獣人は、子供が成人して親元から独り立ちした後、よほどのことがなければ干渉しないものらしい。

それでもジョイは親元を離れてこの国に留学してきて、アナリーズと出会ったことで獣人国へは帰らずそのままこちらで就職、結婚をしてしまった経緯がある。

実家に置いてある荷物もそのままだろうし、いつをもつて親元からの独立とするのかは非常に曖昧だ。

獣人ならではの家族の付き合い方は分からないが、少なくともアナリーズは人間だ。一度くらいはジョイの両親に挨拶をしたいと考えていたので、これはいい機会かもしれない、と思った。

「分かったわ。ちよつと急だけど……しばらくの間お休みを貰えないか職場に相談してみるわね。

ジョイの御両親に御挨拶もしたいし」

「あ、いや。あっちには一人で戻るつもりなんだ。だからアナリーズは無理して仕事を休まないでいい。獣人国は遠いし明日には出発したいから、俺はもう寝るね」

「え……明日!? でも」

「いいから。用事が済んだらすぐに戻ってくるから、アナリーズは何も心配しないで。その、大丈夫だから」

そして翌朝。ジョイは本当に一人で獣人国へと旅立ってしまった。

「……さん。レーベンさん。アナリーズ・レーベンさん!」

「あ、ハイッ! ごめんなさい、少し考え事をしています」

「ああ、いや……それはいいんだけど。真面目な君が仕事中に珍しいね。どうかしたの?」

フランクからフルネームで呼ばれて、ようやく声をかけられているのが自分だということに気が付いた。

結婚してアナリーズ・サンティマンから夫の姓であるアナリーズ・レーベンへと変わったものの、旧姓と比べると馴染みが薄いせいか、名字で呼ばれるとどうしても反応が鈍くなる。

それも、ジョイとこのまま結婚生活を続けていけばいずれ解消されるのだから……

アナリーズは自然とそんなことを考えてしまい動揺した。

(ジョイと結婚生活を続けていけば……嫌だわ、縁起でもない。『続けていければ』じゃなくて、『続けていけば』でしょ。続けていけるに決まっているじゃないの)

余計な考え事のせいで、いつの間にか仕事の手も止まっていたようだ。今の時期はまだ急ぎの仕事がないとはいえ、仕事をため込んで後々大変な思いをするのはアナリーズ自身なのに。

アナリーズは声をかけてきたフランクから交通費の請求を受け取ると、慌てて支払いの処理をした。

「その……ちょっと気になることがあって。でも、大したことじゃないの。はい、貴方が立て替えた分の交通費」

「ありがとう。……でも、本当に大丈夫か? 顔色が優れないけど。僕にできることなら相談に乗るよ。もしかして……獣人の旦那さんのこと?」

「ええと、その……。……実は、貴方にちょっと聞きたいことがあるんだけど。お昼に少しいいかしら?」

心配そうに耳をびくつかせている同僚の姿を見たら、つい、そんな言葉が出てしまった。

実は、フランクとアナリーズは同郷の幼馴染でもある——らしい。自分のことなのに『らしい』としか言えないのは、アナリーズがそのことをまったく覚えていないからだ。

地元には獣人はほとんどいなかったから耳やしっぽを見れば忘れるはずはないと思うのだが、どうやら彼はそれらを隠して生活をしていいたいらしい。アナリーズの地元には獣人差別はなかったが、王都の現状を思うと気付かなかっただけかもしれない。人間視点と獣人視点では感じ方も違うだろうし、事情が事情だけに詳しく聞くのは憚^{はばか}られてしまう。

それでも彼の方はアナリーズのことをよく覚えていたらしく、商会で初めて顔を合わせた時から

部署の壁を越えて何かと世話を焼いてくれた。田舎者のアナリーズにとって、王都でのたった一人の同郷ということで、困ったときにはついつい彼を頼ってしまっていた。

日頃からさりげなく獣人の習性などを話してくれるおかげで、アナリーズは他の獣人商会員との仲も良好だ。そういった意味では獣人であるジョイと仲良くなれたのも、彼のおかげであると言える。

そして、そんな彼からの助言もあって、結婚してからは匂いを気にするジョイのために彼との個人的な交流は避けていた。獣人は自分のテリトリーに他の獣人の匂いを持ち込むのを嫌うらしい。日頃のジョイの態度を見るとそれも頷ける。フランクの方からも一線を引かれた言動をされていて、それを冷たく感じないのは、彼の方から率先して気遣ってくれていた日々の積み重ねがあるからだ。だから本来ならばフランクと接するのは避けるべきなのだろうが、現在ジョイは留守にしているし、行き先を考えればこちらへ帰るのは少なくとも一ヶ月後。

しかも、相談したいのは他ならぬジョイのことだ。

獣人の中でも夫と同じ猫獣人のフランクなら、ジョイの不可思議な行動も理解できるかもしれない。そんな思いで縋るようにフランクを見上げる。

「……っ、もちろん。じゃあ、昼休みにね」

一瞬動揺が走ったように見えたが、交通費を受け取り去っていくフランクのしつぽは、ゆっくりと揺れていた。機嫌がいい時の仕草だ。一瞬の違和感は気のせいだったのだろう。

夫と同種族ということもあり、その後ろ姿を見ているとどうしても様子のおかしかったジョイの

ことが思い出されるが、今は仕事 중이다。

アナリーズはもやもやとした気分を切り替えて、早く昼休憩に入るために目の前の業務に没頭していった。

「――よし、と」

急ぎの仕事を終わらせて、どうにか時間通りに昼休憩に入ることができたアナリーズは、迎えに来てくれたフランクと共に勤め先近くにある飲食店へと移動し、悩みを打ち明けた。

「え。旦那さんが突然一人で獣人国に？」

「ええ、そうなの。少し前から何か様子がおかしくて……心ここにあらずというか。ため息ばかりついているし」

裏路地にあるこの店は、立地からあまり流行ってはいないものの、その分細かなリクエストにも応えてくれるので、商會に所属している獣人たちの秘かなお気に入りとなっている。

今日は仕事で外に出ている商會員が多いからか、同じ商會に勤める客はアナリーズとフランクだけ。他は少し離れた席に人間の客が数人いるのみだ。他の商會員に話を聞かれてしまうことを少しだけ危惧していたが、これならば問題ないだろうとアナリーズはホッとする。とはいえ、獣人対応のできる店というのも少ないので、二人で食事をしながら……となると選択肢はないに等しいのだが。

「うーん……様子を聞いている限り特に病気とかではなさそうだけど……ケガもしてないとすると、

あつちで急用でもできたんじゃない？ 元留学生なら、獣人国で本人がやらないといけない手続きのどれかを忘れていたとか」

「ああ、なるほど。でも、それなら私も連れて行くんじゃないかしら？ 普段の彼なら絶対にそうすると思うんだけど」

「いや？ 流石に獣人国は遠いからなあ。往復だけで一ヶ月はかかるだろう。旦那さんも仕事があるだろうし、用事を済ませたらとんぼ返りする強行軍になるはずだ。そうすると僕たちみたいな獣人は良くても人間にはつらいよ」

「そういうもののなの？ 実は私、この国から出たことがなくて」

「うん。僕は営業職だから国内外問わずあちこち行かされるし、獣人国へも行ったことがあるけど、あれは正直キツかった。しかも、往復一ヶ月と言っても天候によってはもつとかかるし。レーベンさん、今から急に一ヶ月以上の休暇の申請できる？ 罪悪感を覚えないかって意味で」

「それは……、……無理かも」

「できないでいえば、ため込んだ有給休暇を一気に消化すれば可能だろう。しかし、引継ぎもろくにしないまま長期間職場を離れるのは、考えるだけで胃が痛くなりそうだ。」

「だろ？ ああ、それに、基本獣人は個人主義だけど、それでもやっぱり個人差はあるからね。特に、君の旦那さんは留学したままこっちで就職したんだろ？ 家族仲が良くて親離れが早かったならホームシックもあるかもしれない。子供っぽいって言われるかもしれないけど、獣人の郷愁って、故郷を思い出すものを不意打ちで見ると、一気にくるんだ。僕も君と再会した時、本当に懐かしく

て気持ちが生々しいやつたし」

「そうだったの……」

自分と再会した前後でフランクの様子がおかしかった覚えはないが、日頃穏やかで落ち着いている彼でさえ『一気にくる』のであれば、まだ若いジョイは尚更かもしれない。

「あとは……まあ、流石にそんなことはないか。そこまで考えたらキリがないし……」

フランクが何やらブツブツと呟くのを聞き流しながら——話さなければいけないことならもつとはつきり言うだろうという信頼ゆえだ——、やはり、獣人のことは獣人に聞いてみるものだ、とアナリーズは思った。

同僚から例として挙げられた全てがありえそうに思える。

ジョイから家族の話はあまり聞いたことがないけれど、自然豊かな故郷の話なんかはよくしてくれていたし、自然の少ない王都での暮らしを考えればホームシックはあるかもしれない。だとしたら、あまり弱った姿をアナリーズに見せたくなかっただけの可能性もある。

「どう？ 僕の話少しは参考になった？」

「ええ、すごく参考になったわ。ごめんなさい、こんなことで貴方の貴重なお昼休みを奪ってしまつて」

「いいって。君みたいに獣人のことを理解しようとしてくれる人間は貴重だからね。君のおかげで随分とこの商会も居心地が好_よくなったもの。まあ、僕みたいな猫獣人は少し気まぐれなトコがあるし、あまり深く考えなくていいと思うよ」

ゆらゆらとのんびりしつぽを揺らす同僚に話を聞いてもらったら少し気持ちが軽くなった。
確かに考えすぎていたかもしれない。

「分かったわ。ふふ……安心したらお腹空いちゃった」

目の前にはランチセットがあるが、半分ほどが手付かずだった。アナリーズは急いでそれに手を付ける。

夫のジョイは仕事上の付き合いもあるため弁当の持参は月のうち半分ほどだが、アナリーズは節約のためにお昼は毎日手作りの弁当で済ませている。

今日は食欲がなくて弁当作りをサボってしまったが、アナリーズにとっては久しぶりの外食なのだ。残すなんてもつたいない。

自分の分をとくに食べ終えて、のんびりと食後のお茶を楽しんでいたフランクがそんなアナリーズを優しく見つめる。

「はは、良かった。ようやく食欲も出たみたいだね。せっかくだから、旦那さんがいないこの機会に日頃できないことでもやったら？ ほら、友達と美味^{おい}しいものを食べに行くとか、同僚と飲みに行くとかさ。伴侶持ちの獣人は執着心が強いからそれも難しいでしょ。僕で良かったら愚痴を聞くくらい付き合うよ」

「ありがとう。でも、大丈夫。話を聞いてもらったおかげでスッキリしたから。そうだ、せっかくだから貴方が言う通り、この機会に部屋の大掃除でもやろうかしら？ あの人お気に入りのソファから動かこうとしないから、すぐ毛だらけになっちゃって困っていたのよ。考えてみたら、掃

除だって今がチャンスよね！」

その言葉に残念そうな目をした同僚には気付かず、アナリーズはご機嫌で残っていた昼食を次々に片付けていった。

そうして商会在休みの週末、どうせやるなら徹底的に掃除をしようと思い立ち、アナリーズは自宅で忙しく動き回っていた。

「これでよし、と。こまめに掃除をしていても、結構汚れてたまるものなのね」

アナリーズは掃除の手を止めて、額の汗を拭った。

やり始めたばかりがないのは分かっていたが、元々アナリーズは凝り性なのだ。昔から何かにハマり込むと、一日中そのことだけに費やすことが多かった。

商会に入りたての頃は異なった価値観を持つ獣人商会員とのやり取りを円滑に進めるために、一日中王都にある図書館に籠^{こも}って獣人に関する書籍を読み漁っていたこともある。それでも分からないことはフランクに聞いた。

真面目と言えば真面目だが、それだけ他者との関わりが少なかった、とも言える。

子供の頃は、近所にたまたま年老いた獣人の学者が一人で住んでいて、よくその人に勉強を見てもらっていた。

田舎町、しかも今より更に更に獣人が珍しい時代ではあったが、偏見の目で見える者もおらず、穏やかな老獣人は自然と町に溶け込んでいた。かなりの高齢で、現在の王都で言われているような力強い

印象がなく、いわゆる『陽だまりの中でお昼寝している老猫』のイメージそのものだったからかもしれない。

何の研究をしているのかはよく分からなかったが、気のいい彼はよく近所の子供たちを集めて勉強を教えてくれていた。アナリーズだけでなく、フランクも一時期そこで学んでいたらしい。残念ながら記憶に残っていないが、それでも先生が獣人なのだから他に獣人がいたとしても何の不思議もないし、あの勉強会に混ざる幼いフランクを想像すると、しっくりくる。

老獣人から遊びの延長のように教えられる勉強はとても面白くて、その後両親を早くに亡くしたアナリーズが奨学金を貰いながらも勉強を続けられたのは彼のおかげと言っている。

結果、獣人に対しては彼の印象が強く、獣人という種族そのものを怖いと思ったことはないまま大人になった。

王都に住むアナリーズの世代で、こういう感覚の人間は珍しいそうだ。後になって聞いた話だが、就職のため、王都にある商会で面接試験を受けた時に『この先ウチの商会は獣人国との取引に力を入れていく予定なんだ』と面接官に言われて満面の笑みになったのは、アナリーズただ一人だったらしい。そのおかげもあって、アナリーズは無事に今の商会で雇ってもらえることになったのだ。そういった意味ではアナリーズは恩師である獣人学者に就職先まで面倒を見てもらったことになる。

残念ながら進学のため地元を離れている間に老学者はどこかへ引越してしまっただけで、お礼を言えず仕舞いになってしまったが、彼の存在は今もアナリーズの胸の中にしっかりと残っている。

「……そういえば先生っていったい何の獣人だったのかしら？」

獣人だったのは間違いないが、そもそも獣人に種族があることすら理解していなかった頃のことなので正直よく分からない。老猫のイメージがあるが、ネコ科の獣を祖とする獣人は耳だけだともまり区別がつかない、ということを経験してから知った。しっぽでも覚えていれば少しは違ったのだろうが、あいにく教科書や黒板を見るのに忙しくてしっぽの記憶はまったくない。

散々お世話になっておいて薄情なことこの上ないが、アナリーズにとって恩師である先生はあくまでも『先生』であって、彼が獣人であることは彼を構成する要素の一つでしかなかったのだ。

「……先生がもしも猫獣人だったら、私が親しい獣人って、猫獣人ばかりなのね」

多種多様な獣人たちが働く王都の商会で毎日楽しく働いているが、残念ながら話が合うのは同郷のフランクぐらいだ。だからといって異性の彼を気軽に誘うわけにもいかず、そもそも王都出身ではなく知り合いが少ないことも相まって、ジョイと出会うまで休みの日は家で過ごしていることが多かった。

せっかくの休日。こうして一人で掃除をして過ごしていると、王都に馴染めず少し寂しかったあの頃のことを思い出す。

けれどあの頃とは違い、部屋のあちこちには『夫』の痕跡が残っているのだ。

駄目だと言っているのにアナリーズの気に入っているテールで爪を研ぐから傷だらけだし。

棚の上の飾りを勝手に動かすから、すぐにぐちゃぐちゃになってしまっしうし。

そうした何気ない日常の痕跡が、アナリーズの沈みそうになる気持ちを慰めてくれる。



「これは……傷を隠しても無駄かしら。ううん、とりあえずやるだけはやってみよう。ふふ……爪とぎ跡が全部なくなっていたら驚くかしら？ あらやだ、このぬいぐるみ、こんなところにあっただのね。もー……ボロボロじゃない」

まだ商会に入ったばかりの頃、出張のお土産にフランクがくれたぬいぐるみだ。とても気に入っていたのに、ジョイと同棲を始めた頃にどこかになくしてしまっただけだった。

そうやってアナリーズが部屋に残った夫の痕跡と格闘しているうちに、あっという間に夫不在の一ヶ月が過ぎていった。

「ただいま！ アナリーズ、すごく会いたかった!!」

獣人国から帰ってきた夫は、出掛ける時とは打って変わってご機嫌だった。まるで不在時の空白を埋めるかのように、アナリーズにベタベタとくっついてくる。

フランクが言っていたように、少し考えすぎていたのかもしれない。そう思えるほどに夫は元気を取り戻していた。

「あ！ 今、何を考えていたの？ 他の人のこと考えていたよね!? アナリーズ、俺がいない間、他のオスと仲良くしたりしてないだろうな。そういえば、何か部屋から俺の匂いが消えているんだけど。……どれどれ？」

「あ、ちょっと。も〜」

そうやって眉間にしわを寄せ、アナリーズに鼻を寄せてスンスンとしつこく匂いを嗅いでくる夫

にホッとすることも、少しだけ不安は残る。

アナリーズに何も言わずに、気まぐれに一ヶ月も家を空けた夫。何をしに獣人国へ行ったのかを聞いてもはぐらかされるし、彼がどうしてそんな行動を取ったのかは今も分からない。

それでも、ニコニコと機嫌よくお気に入りのソファアを陣取る様子は以前と何一つ変わっていないし、隣にアナリーズを座らせて機嫌を良くしている夫を見ると、このまま元の日常が戻ってくるのだと思えてくる。

優しい夫。甘えん坊な夫。

ヤキモチ焼きで、アナリーズの全てを開い込もうとする夫。

仕事が早く終われば職場まで迎えに来てくれて、健康を考えたアナリーズの手作り弁当を喜んでくれる。

休みの日にはたとえ自分が仕事で疲れていても、アナリーズをあちこち連れまわして一緒に楽しもうとしてくれる。

どれもが今までと変わらない。

——それなのに。

微かな違和感がアナリーズの幸せな日常を侵食してくるまでに、そう時間はかからなかった。

「今日もジョイは残業なのね。ま、休んでいた分仕事が溜まっているみたいだし仕方がないか。今日の晩ご飯どうしよう。あら？ 私宛に手紙が来ているわ。いったい誰から……えっ!？」

夫が家に戻って少し経った頃、夫の母親からアナリーズに手紙が来た。どうやら夫は獣人国に戻っている間、実家に滞在していたらしい。

内容はただの近況報告だったが、そちらで何か変わったことはないか、夫婦仲良くやっているのかと、探りを入れるような文面も混じっていた。近いうちにそちらへ行こうと思うとも書かれている。驚かせたので、自分が行くことはジョイには内緒にしてほしい、とも。

今までになかったことだが、家族への挨拶は必要だと思っていたし、何よりジョイが電撃里帰りを果たした後だ。あちらはあちらで慣れぬ異国で生活している息子を心配しているのかもしれない。義母の言いつけを守った上で『お待ちしております』と返事を出しておいた。

夫の留守中、家中を徹底的に磨き上げたおかげで焦ることもない。

このタイミングでの義母の来訪はアナリーズとしてもむしろ歓迎すべきことだった。

帰国したジョイとは仲良くやっている。

帰って早々は残業続きで別々に眠ることが多かったが、ある時を境に完全に元に戻った。

久しぶりに関係を持った時は新婚当初を思い出して途方に暮れてしまうくらい元氣すぎて困ったが、今はそれも落ち着いていた。

時折、無意識に家具に爪を立ててしまったときのように、そつと目を逸らされることはあったけれど、いつの間にやら直したはずの家具の傷が元の状態に戻っているのを考えればおかしくない。ジョイが匂いを気にするのもいつものことだ。アナリーズの匂いではなく自分の匂いを気にするようになったのは珍しいことだが、学生時代、飲み屋でのバイト中に香水臭いお客に絡まれた際に

同じ行動を取っていたことがある。なので、仕事先でそういったことがあったと思えば特におかしくはない。

そうやって、少しの違和感を覚えながらも、夫と元の生活を送っていた時に、ジョイの母親が家を訪ねてきた。

「初めまして。貴女がアナリーズさんね？」

そう言つて微笑む女性がジョイの母親だと分かったのは、その姿が驚くほど夫に似ていたからだ。義母との手紙のやり取りで、獣人同士の結婚で出産が早かったのは聞いていたが、とても四十代には見えないくらいに義母は若かった。ジョイの姉と言つても通りそうなほどだ。

迎えに出た玄関先でついつい見惚れてしまったが、アナリーズは慌てて義母を居間へと案内した。「まあ、座り心地の好きそうな素敵なソファアー！」

そう言つて、アナリーズがどうぞと勧める前からジョイお気に入りソファを陣取る姿に夫を重ねて微笑ましくなる。

とりあえず家に常備してあるジョイが好きなお菓子とお茶を義母に出すと、それも気に入つてくれた。どうやら、顔だけでなく、好みまでジョイは母親に似ているらしい。

「ふふふ、ジョイから聞いていた通りだわ。アナリーズさんはとても感じのいい人ね。結婚式に出席できなくてごめんなさいね？ 夫のケガが酷くて、長時間の移動が無理だったのよ」

「!! すみませんお義母様。私、何も聞いていなくて……お義父様の御加減は大丈夫なのですか？」

「あー、平気、平気。気にしないで、獣人は丈夫だし、そもそも夫にケガをさせたのは私だもの。聞いてくれる？ あの人ったら、他のメスの匂いを付けて帰ってきたのよ。つい、頭にきちゃって」

何てことないような様子で、そんなことを笑いながら言ってくる義母に少し引きながらも、やはり獣人は匂いを気にするようだと言つてくる義母に少し引きながらも、やはり

「あの人、そういった配慮が足りないのよねえ。でも、貴女は気を付けてくれているみたいで安心したわ。この部屋にはジョイの匂いしかないもの！ ジョイは幸せ者ね」

スンツと鼻を鳴らす義母の姿はジョイそのもの。

喜んでくれているところを申し訳ないが、アナリーズには義母に伝えねばいけないことがある。

「あの……申し訳ありません、お義母様。今日、ジョイは商会の用事で出勤しているんです。だから、帰りが何時になるか……」

「あー、いいのいいの。今日ここに来たのはジョイに会うためじゃなくて、アナリーズさん、貴女に話があるからなのよ」

「私に……ですか？」

チロリと、ジョイに似た義母の目が、アナリーズの目を正面から見据える。

それを見て不思議に思つた。獣人は、直視されるのを嫌うのではなかったか。

まるで獲物の様子を窺うような義母の目線は気になるが、わざわざアナリーズに会いに来てくれたのだ。義母に嫌な思ひはさせたくない。

義母にお茶のおかわりを注ぐふりをして、アナリーズはさりげなく視線を外す。

そんなアナリーズの動きを見て、ふう……と義母はため息をつく。

もしかしておかわりのお茶が熱すぎたのだろうか。なるべく義母の目を凝視しないように注意を払いつつ、アナリーズが様子を窺う。

「……聞いていた通り、細やかな配慮の行き届いたとてもいいお嬢さんね。留学中のあの子から好きな子と暮らしたいから移住すると報告された時は驚いたけれど、こうして実際にお会いしてみ、ジョイが気に入ったのも分かるわ。私もとても貴女が気に入ったもの。——でも」

キレイな義母の口元に柔らかな笑みが浮かぶのが見えた。義母からかけられた温かい言葉にホッとしつつも、続けられた発言にアナリーズは不安を覚える。

「アナリーズさん。悪いけれど、ジョイとは別れてくれないかしら？」

「……は……？ え。別れ……る？」

突然義母から言われたひと言にアナリーズの理解が追いつかない。これまで義母との間に直接の交流はなかったが、特に嫌われてはいないはずだ。何なら今日初めてお会いしたが、義母からは気遣うような言葉をかけてもらえていた。

それとも、もしやアナリーズが自分でも気付かぬうちに、今日のこの僅かな時間で義母を怒らせるようなことをしてしまったのだろうか？

「あ……の、お義母様。もしかして私が何か失礼なことを」

「ああ、違うの。誤解しないで！ 貴女には何も問題はないわ。むしろ、何か問題でもあってくれば、もう少し言い出しやすかったのだけ……。こうして実際お会いしてみても貴女はとてもい

いお嬢さんみたいだし、息子が貴女を選んだのもよく分かる。私も気に入ったしね。それだけに、貴女には申し訳ないと思っているのよ。——でもね、どうやら息子は『番』に出会ってしまったらしいのよ」

気遣うような義母の声が、アナリーズの耳を通り抜けていく。

まるで意味をなさない音のように。

けれど、決して無視することのできない重みを持って。

「つが……い……？」

アナリーズの呟くような言葉を拾った義母の耳がピクリと動く。痛ましいものを見るような表情が、それが聞き違いなどではないことを物語っている。

獣人と人生を歩むことを決めた以上、それは絶対に避けられない問題であることは理解している。常識としても知っている。もちろん、その遭遇率の低さについても。

昔に比べて増えてきたとはいえ、国内において獣人の人口はまだまだ少ない。

まるで何かに導かれるように、獣人国へと旅立った夫。

——だとすれば。

「それは……獣人国内で………？」

「あ、ううん。そうじゃなくて……と、いうか私たちもハッキリとは聞いていないの。ただ、どうやらジョイが『番持ち』について調べまわっていたみたいなのよね。それでピンと来たの」

義母によると、獣人国へ戻ったジョイは、親戚や友人の伝手を頼って番と出会った獣人に接触を

図ろうとしていたらしい。ジョイから番について話を聞かれた親戚から『もしやジョイは番と出会ったのでは?』と言われて義母は確信したのだとか。

「あの子は否定していたけれど、母親だから分かるのよ。それに、ウチにやってきた時から様子がおかしかったから、おそらく見つけたのはこちらの国内でだと思うわ。貴女であれば……と願っていたのだけど、そうだったらとくに報告をしていると思うし、何より私に聞かれて否定する理由がないもの。本来、こうして独り立ちした子供の生活に口出しするのはマナー違反なんだけど……『番』を見つけることは一族にとつての悲願でもあるの。獣人の間では結婚後に番が見つかった場合、別れて番と再婚するのが一般的だね」

「そんな」

アナリーズの理解が何一つ追いつかぬままに、どんどん話だけが進んでいく。氣遣うような声とは対照的に、義母の口から語られる内容はどうしようもないほど残酷だった。

「ごめんなさい。突然こんな話をされてアナリーズさんが混乱するのも分かるわ。私たち獣人と違って、人間の貴女には理解し難い感覚だもの。……でもね、ジョイとの離婚は貴女にとつても悪くない提案だと思うのよ」

「それは……どういう意味ですか?」

愛する夫と別れることのどこが悪くない提案だというのか。悪気のない、心からそう思っているような義母の物言いには苛立ちを覚える。

耳を塞いで次々と与えられる情報を排除してしまいたい。けれど、それが一時的な逃げでしか

いことは分かっているし、何よりアナリーズ自身、義母の言葉を拒絶することができないのだ。

鋭利な言葉が次々と心に刺さっていく痛みを感じながらも、ジョイへの思いが逃げることを拒否している。痛みと共に与えられる情報の中から、僅かな希望を見つけ出そうと躍起になっている。

そんなアナリーズの思いを知ってか知らずか、義母の言葉は続く。

「私たち獣人はね、『運命の番』に出会うと運命に縛られてしまうの。抗おうとしても身体に無理が出る。ハッキリ言ってしまうとね、番以外とは身体を繋げられなくなるの。それまでどんなに愛し合っていたとしても、ジョイが貴女に愛を囁いていたとしても、そうやってしまえば身体の方が反応しないのよ。……どう? 貴女にも覚えがあるんじゃないかしら?」

「……………」

ある日、真っ青になって帰宅してから。

何やら考え込み、ボーっとしてため息ばかりをついていた夫。アナリーズに愛を囁きいい雰囲気になっても、理由をつけて行為を途中でやめる夫。

確かに、義母の言葉は覚えのあることばかり。

……………」

「うちの子……ジョイはアナリーズさんを愛していたからこそ、貴女に真実を言い出せなかったのでしょうね。だからあんなに竊れて……相当苦しんだと思うわ。母親として見ていられなかった。もしかしたら、獣人国で番を探していたのも経験者の意見を聞きたかったのではないかしら。

獣人国内でも番持ちは稀だけど、この国よりは見つかるはずだもの。ねえ、アナリーズさん。貴女

もまだ若いし、このまま運命の番を見つけたジョイと未来のない空虚な関係が続けるよりも、あの子と離婚して新しい人とやり直した方がいいと思うの」

「……あの……抱……ました」

「え？ あ、何？ ごめんなさい、よく聞こえなくって」

「……………確かに獣人国へと行く前に、ひと月ほど……………具合が悪そうにしている、そういう行爲をしていませんでした。しようとして……………やめてしまったこともあって。でも……………その……………」

「まあ、やっぱり！ ……つて、え？ アナリーズさん、今何て？」

アナリーズの話聞き、義母が満面の笑みを浮かべて顔の前で両方の手のひらを軽快に合わせる。深刻な話題の中にあつて、どこか嬉しそうなのはジョイに番が見つかったと確信を持ったからだろう。だが、義母はアナリーズが続けて言った言葉を慌てて聞き返す。

（言いづらい。言いづらいけれど、ハッキリと言わないと）

アナリーズは意を決して、でも、決して義母の目を見ては言えないことを言った。

「……獣人国から戻ってからは、ジョイ……さん、との間にそういう行爲がありました……その、何度も……です……」

アナリーズの言葉に部屋に静寂が訪れる。

気まずい。夫の母親に言うべきことではないが、この調子では本当にジョイと別れさせられてしまいそうでアナリーズは不安だった。もちろん、それで全ての不安が消えるわけではないが、とり

あえずの前提条件は崩せるはずだ。

義母曰く。

ジョイは番に出会った。番と出会ったら番以外を抱くことはできない。だからアナリーズはジョイと別れた方がいい。

けれど、獣人国から戻った後にジョイはアナリーズを抱いたのだ。それも、複数回。

つまり、『番と出会った』という前提条件が崩れたことになる。

「え……本当に？ 貴女の記憶違い、とかではなくて？」

「……………その、念のために記録をとっているの。夫から、まだ二人で過ごしたいと言われて。だから……………」

アナリーズの告白を聞いて困惑する義母。

獣人への気遣いではなく、恥ずかしくて義母の顔を見られない。よくよく考えると、夫の母親に何を事細かに報告しているのだろうか。

アナリーズが真っ赤になつて義母の様子を窺うと、見るからに狼狽していた。

「あらあら、まあまあ！ 嫌だわ、私ったら。とんでもない勘違いを……………」

それだけ自分の考えに自信があつたのだろう。恥ずかしくはあつたが、夫婦のプライベートなことを暴露しただけの成果はあつたようだ。

「あの……………ごめんなさい！ さっきの言葉は忘れてちょうだい!! ジョイのアナリーズさんへの思いは本物なのよ。獣人国に滞在中も番のことをちよつと聞いただけですごい目で睨まれたし。もし